

CAN-DO リストにおける活用と評価

— PDCA サイクルの確立を目指して —

教科教育高度化分野 (16220905) 武 山 史 哉

文部科学省は、中学校・高等学校の英語科において、学習到達目標 (CAN-DO リスト等) を活用することを促しているが、あまり活用されていないのが現状である。本研究では、この問題を解決するため、CAN-DO リストを活用した授業のモデルケースを提案することを目的とする。実験と検証の結果、CAN-DO リストを活用する際、一人よりもペアになり、やりとりを基本にした言語活動を行った際、特に効果が認められた。今後はこれを基に授業例を構築していくことにする。

[キーワード] CAN-DO リストの活用法, 学習到達目標, 評価, 達成状況把握, ライティング

1 問題の所在と方法

(1) 問題の所在

文部科学省は、中学校・高等学校の英語科において、学習到達目標 (CAN-DO リスト等) を活用することを推し進めている。しかし、CAN-DO リストを「設定」(作成) している中学校は、平成 27 年度で、約半数に過ぎず、「達成状況の把握」(活用と評価) に関しては、わずか 22.2% に留まっている。

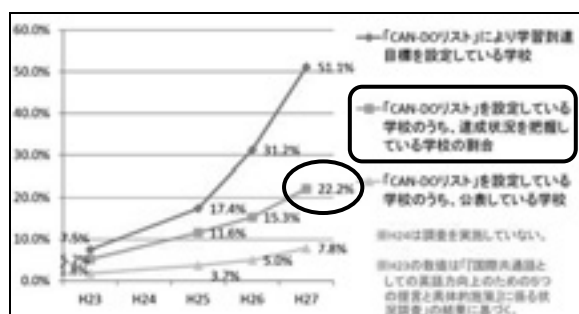


図1 平成27年度英語教育実施状況調査(中学校)の結果概要「CAN-DO リスト」による学習到達目標の設定・公表・達成状況の把握(強調は筆者による。)

(2) 課題意識と研究の目的

次期学習指導要領の改訂において、CAN-DO リスト作成が各小・中・高等学校に求められるようになるのに対して、現状のCAN-DO 設定率は高いとは言えず、さらに最も重要となる活用率はさらに低い割合となっている。単元版CAN-DO リストを作成する上で参考とした、2015年度の福島県猪苗代教育委員会の報告書でも、授業内での活用と達成状況把握までは行われていない。資質・能力の獲得、向上が求められている近年、「言語を使って何がで

きるか」という視点で成り立っているCAN-DO リストは今後さらに重要になってくる。そこで本研究は、小学校と高等学校をつなぐ立場である中学校段階においてCAN-DO リストの作成、活用を行い、その実践を通してCAN-DO リスト改訂のPDCA サイクルを確立することを目指すものである。

(2) 研究方法

以下の方法で、研究及び実践を行った。

- ①自作CAN-DO リストを用い、教職専門実習Ⅰで、授業実践の中でのリスト活用法を確立する。
- ②教職専門実習Ⅰにおける、生徒のワークシートの記述等から成果と課題を明らかにする。
- ③教職専門実習Ⅰでの成果と課題を基に、教職専門実習Ⅱにおいて実践、比較調査を行う。
- ④教職専門実習Ⅱにおいて比較調査を行った結果から、CAN-DO リスト活用の効果を測定し、リスト改善につなげる。

2 実践について

(1) 教職専門実習Ⅰにおける実践

教職専門実習Ⅰでは、山形県内A中学校において自作CAN-DO リストを用い、授業内での活用法の確立を目指した実践を行った。対象は第二学年の生徒157名であり、学習単元はSunshine English Course 2 Program 5, Gulliver's Travels である。全6時間扱いとし、各授業の最後に、その時間で学習した文法を用いた短い条件作文の課題を課し、4技能のうち書くことの能力を継続的に測定した。また、ワークシートの最後には振り返りを設け、振り返り項目の点数と自由記述によってCAN-DO

の達成度を自己評価できる項目を設定した。

使用した CAN-DO リストは、自作年間版 CAN-DO リストを基に、実習校の生徒実態に合わせて4技能それぞれに能力記述文を設定した、単元版 CAN-DO リストである。また、単元版 CAN-DO リスト文章表現を調整し、生徒達に「単元のゴール」として示した。各時間の目標についても、生徒達が授業中に使用するワークシートの最初に、めあてのように「Today's Goal」として示した。生徒達には単元版 CAN-DO リストと毎時間版の CAN-DO リストの2つが手元にわたるような形となり、これを生徒に対する CAN-DO リストの公表とした。

(2) 教職専門実習Ⅰの実践からの学び

この教職実践演習Ⅰでの実践から、成果として、単元のゴールを設定したことによって、教科書の各パートの役割が明確化し、どこでどんな技能を扱うかという道筋を設定することができたことが挙げられる。

一方、実際に活用した結果として CAN-DO 実施面での課題が見えた。1つ目に、1つのパートにおいても4技能の CAN-DO リストを作成する必要性があったことである。実習Ⅰでは、単元版 CAN-DO リストだけを用いて1つのパートを2時間扱いで実施した。その結果、単元版 CAN-DO リストで設定した目標だけでは対応しきれない内容が出てきてしまった。そのため実習Ⅱでは、各パート版 CAN-DO リストを作成することで、単元 CAN-DO リストよりもさらに細かい目標を設定する。この結果、各パートで求められている能力を明確化することができ、より効果的に CAN-DO リストを活用した授業を行うことができると考えた。

2つ目に、CAN-DO リストを用いて定めた目標と振り返りをリンクさせることである。実習Ⅰでは、Today's Goal を毎時間示していた。しかし、生徒に対し、Today's Goal を意識して振り返りを書くような指示は出していなかったため、目標を意識せずに自己評価を行ってしまった可能性がある。その根拠として、生徒達の自己評価がどのクラスもとても高い値を示していることがある。もちろん、目標を達成していると言える生徒も多く存在しているが、自分の課題への出来に関係なく高い自己評価を常につけ続けている生徒達も見受けられた。自分事として CAN-DO リストの目標を達成しているかどうかを考えられるような授業の進行の仕方や、自分の学びをしっかりと客観視できるよ

うな手立てをとらなくてはならないと考えた。

(3) 教職専門実習Ⅱでの実践

山形県内B中学校において、教職専門実習Ⅰにおける経験を基にして実践を行った。対象は第二学年のうち2クラス60名である。学習単元はNEW HORIZON English Course 2 Unit 5, Universal Design である。2クラスのうち、C組には CAN-DO リストを活用しない通常の授業を8時間行い、D組には CAN-DO リストを活用した授業実践を8時間行った。この2クラスの7時間分の実践の結果の比較を通して、CAN-DO リストを活用した授業法の効果測定を行うこととした。方法として、各授業の最後にその授業で扱った文法事項を用いた条件英作文を課した。今回の英作文では、文法事項を用いた文に加えて、なぜその文を書いたのかの理由も記述させ、意見・主張とその理由を述べるといった実際のコミュニケーションの場面を想定した形式を取り、問題によっては、意見、理由に関連させた自分オリジナルの文を考えて書くという課題とした(図2)。また、今回の実践でも振り返りの時間を設け、点数と自由記述形式で生徒がその時間の中での自分の学びと CAN-DO リストの達成度を自己評価できるようにした。

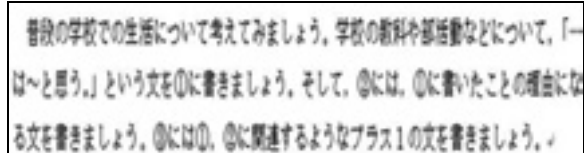


図2 Unit 5 Part 2 1時間目の英作文問題

今回用いた CAN-DO リストは、教科書に付随している単元 CAN-DO をもとに、各パートの目標を4技能で記述した(表1)。これは、1つのパートを2時間扱いで行ったとしても、各時間で重点的に扱う技能を明確にすることができ、これらを達成することによって1つのパートを通して4技能をすべて伸ばしていくことができる。また、すべてのパートでこの CAN-DO を達成していくことで、単元の目標を達成するという形式をとった。

表1 パート版 CAN-DO リスト

教科書	学習日	基本文・内容	具体的目標
P68.69		接続詞if	すぐ周りの日用品の名前を聞いて、理解することができる。
			ある条件を表わす文を聞いて、その要点を聞き取ることができる。
			前もって話すことを準備すれば、ある条件で何をするかを話すことができる。
			絵があれば、簡単な情報資料(ポスター、カタログ、広告など)の内容の意図を理解することができる。
			ある条件で何をするかを表わす表現を用いて、文を書くことができる。

CAN-DO を用いたクラスに関しては、教職専門実習Ⅰの際と同様の手立てを行った上で、到達目標を示す際に、どのような活動を最後に行うかを明示し、授業の見通しを与えた。加えて、授業中は言語活動を重視し、文法事項の解説に関しても、実際のコミュニケーションの中でどのように活用できるのかという視点で行った。また、振り返りを行う前には、もう一度 Today's Goal を確認してから自己の学びを振り返り、自己評価を行うことができるような手立てを行った。

一方、CAN-DO を用いないクラスについては、到達目標を示さず本時の見通しも示さないまま授業を行い、言語活動の時間よりも文法事項の解説や習熟の時間に重点を置いた。各授業におけるその他の特徴については、表 2 の通りである。

表 2 各授業の特徴

Unit5	各授業の特徴
Part1 ①	D組には言語活動を行い、C組は練習問題をメインとし、言語活動は行わなかった。
Part2 ①	D組では発表内容に対する賛成・反対の意見のやりとりを行った。C組では実施しなかった。
Part2 ②	言語活動を、D組では生徒同士で行わせ、C組は教師対生徒全体で行った。
Part3 ①	言語活動の際、D組では書いたことに加えて「理由」も伝えさせた。一方C組では、書いたことだけを相手に伝えた。
Part3 ②	Today's Goalを示したか示していないか。
Part4 ①	両クラスとも、意見の共有活動を行ったD組では、教師が示したToday's Goalを自分でワークシートの記入させた。
Part4 ②	両クラスともに、教科書内容に関わる課題を課した。

(4) 教職専門実習Ⅱの実践の成果と課題

①ワークシートの記述内容の評価

教職専門実習Ⅱでは、CAN-DO リスト活用成果を見るために、条件英作文における表現点と、生徒の自己評価の点数に対して統計処理等を行った。条件作文の表現点の採点基準は以下の通りである。表現点：5点満点、未習の単語を使用しても自由に書きたいことを表現している(加点項目)、コミュニケーションの場面を想定した際、話の流れが自然であること、理由やプラス1の文が例文の丸写しになっていないこと。

②各採点の統計処理から

各授業の2クラスの表現点の平均は、CAN-DO リストを用いたD組の方が高い傾向にあった。そこで、CAN-DO リストを活用したD組と、CAN-DO リストを活用していないC組の表現点をマン・ホイットニーのU検定を用いて、有意差を測定した。そ

の結果、有意差として認められる0.05ポイント以下の有意確率は出なかった。しかし、Unit5 Part2の1時間目の授業のみ有意確立が約0.08となり、有意差の傾向が認められた(表3)。この要因として、前述の表2でも述べられている通り、この授業だけCAN-DO リストを活用したD組では、やりとりの活動を行い、C組ではやりとりの活動を行っていないことが挙げられる。これにより、CAN-DO リスト活用の際には、やりとりの活動が好影響を及ぼす可能性が明らかとなった。

表 3 表現点統計結果

授業時間	データ数	平均点	標準偏差	有意確率 U(両側)
Unit5 Part1 ①	C組=30 D組=28	3.4666667 3.6785714	1.3097922 1.7124246	0.17798290 2792 n. s.
Unit5 Part2 ①	C組=30 D組=28	3.333333 4.107143	1.738454 1.205324	0.08216562 55875 †
Unit5 Part2 ②	C組=30 D組=31	4 3.9	0.5163978 0.9073772	0.79788690 0954 n. s.
Unit5 Part3 ①	C組=30 D組=29	3.8666667 4.1724138	1.0561986 0.9850246	0.25149301 0178 n. s.
Unit5 Part3 ②	C組=24 D組=29	3.375 3.6206897	0.9921567 1.1571008	0.23616531 0331 n. s.
Unit5 Part4 ①	C組=28 D組=22	3.6071429 3.7727273	1.1753202 1.2406676	0.54254605 5275 n. s.
Unit5 Part4 ①	C組=27 D組=28	2.2222222 2.6428571	0.993808 1.2876969	0.14771852 3383 n. s.

(**p<.01, *p<.05, †p<.1)

③自己評価との相関調査から

CAN-DO リストを用いたD組と用いていないC組の生徒達の振り返り項目のうち、条件英作文の出来を自己評価する項目と、実際の英作文の表現点の点数との相関関係を調査した。その結果、CAN-DO リストを用いたD組の方が、C組の方よりも自己評価と各採点項目の点数との相関関係があることが分かった(表4)。

表 4 生徒の自己評価と表現点の相関関係

	C組	D組
Unit5 Part1 ①	0.57347	0.624436
Unit5 Part2 ①	0.532599	0.636786
Unit5 Part2 ②	0.374345	-0.02839
Unit5 Part3 ①	0.38329	0.374795
Unit5 Part3 ②	-0.17025	0.36549
Unit5 Part4 ①	0.25992	0.296242
Unit5 Part4 ②	-0.30237	0.606902

3 到達点と課題

(1) 到達点

本研究の到達点として、3点挙げる。1点目に、

CAN-DO リスト活用の際には、各パートにおけるリストを4技能で作成することが望ましいということである。これにより、各時間の到達目標がさらに明確化し、各授業の重点目標を設定しやすいという利点が生まれた。また、授業ごとの重点目標が明確化することによって、学習者が明確に学びの見通しを持つことができる可能性も考えられる。

2点目に、相関関係の調査から、学習者の自己評価に対する効果が認められたことである。授業における学習到達目標を最初に明示し、見通しを持たせ、振り返りの際にもう一度目標を確認する。そのうえで自己評価を行うことによって、学習者はその授業内での自己の学びを的確に振り返り、評価することができることが明らかとなった。これは、年間版や単元版 CAN-DO リストの達成状況把握に対して大きな影響を与えることが考えられる。

3点目に、教職専門実習Ⅱにおける表現点の有意差計測において、Unit 5 Part 2の1時間目の授業のデータのみ、CAN-DO リスト活用の有無による表現点の平均点の差に、有意差傾向が認められた。この授業では、相手の発表に対して自分は賛成か反対か立場を明らかにして、やりとりを行っている。このような、やりとりの活動が CAN-DO リスト活用において学習者の学びに好影響を及ぼす可能性が明らかとなった。

(2) 課題

本研究における課題として、2点挙げる。1点目に、教職専門実習Ⅱにおいて、Unit 5 Part 2の2時間目のみ、CAN-DO リストを活用していないC組の方が平均点数及び相関関係において CAN-DO リストを活用しているD組の成績を上回っていた。この結果のみ、CAN-DO リストを用いた方は学習効果がなかったことになる。しかし、表現点には有意差が認められなかった。この結果を受けて、実践を行った際の記録及び生徒のワークシートの記述の分析等、様々な観点から引き続き調査を行い、この結果をもたらした要因について明らかにしていきたい。

2点目に、やりとりの活動を行った授業において、CAN-DO リストを用いたクラスの表現点に好影響が認められたことを受け、やりとりの活動と CAN-DO リストの活用法の関連について追究していく必要があると考える。そのため、今後は、やりとりの活動を中心とした CAN-DO リスト活用型の授業形態をさらに考案し、それらを実践する

ことを通して効果の検証を行うとともに、CAN-DO リストの評価・改訂につなげていきたい。

引用文献

文部科学省(2016)「平成 27 年度 英語教育実施状況調査(中学校)の結果概要」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/04/05/1369254_2_1.pdf (最終閲覧日 2016 年 12 月 1 日)

参考文献

福島県猪苗代町教育委員会(2015)「平成 26 年度英語指導力向上事業 指導と評価改善による教師の指導力向上及び生徒の英語力の向上」

http://www.koukou.fks.ed.jp/htdocs/?action=cabinet_action_main_download&block_id=139&room_id=51&cabinet_id=8&file_id=983&upload_id=1374 (最終閲覧日 2016 年 1 月 25 日)

文部科学省(2016)「平成 27 年度 英語教育実施状況調査(高等学校)の結果概要」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/04/05/1369254_3_1.pdf (最終閲覧日 2016 年 12 月 1 日)

文部科学省教育課程部会(2016)「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」Pp. 252-271

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_1_5.pdf (最終閲覧日 2016 年 12 月 1 日)

文部科学省初等・中等教育局(2013)「各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標設定のための手引き」

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2013/05/08/1332306_4.pdf (最終閲覧日 2016 年 11 月 29 日)

投野 由紀夫編(2013)『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』, 大修館書店。

A Study of the Practical Use of the CAN-DO List to Establish a PDCA Cycle to Improve English Education
Fumiya TAKEYAMA